都市河川における魅力的なふれあい推進事業に関する事例研究
～室見川・那珂川・樋井川を事例として～

福岡大学大学院　学生員○梅崎健史　　福岡大学工学部　正会員　渡辺亮一
福岡大学工学部　正会員　山崎惟義　　福岡大学大学院　学生員　高辻伸彰

1. はじめに

その昔、川では子供達が泳いだり、魚を採ったりする光景は当たり前のように見られていた。このため、流域に住む人々は日頃から川に注意を払い、川を汚す人もいなかった。また、川で起こる微妙な変化にも敏感であった。しかし、昭和 30 年代を境に全国各地で都市化が進み、川はコンクリートに覆われた構造物へと変わっていった。その結果、今現在では人々は川にあまり近づけなくなり、川に対する興味を失っていった。そこで、我々土木技術者は流域住民の方に川に再び興味を持っていただくきっかけをつくり、川の魅力を伝え、川に対する意識を高めて行く必要があると考えられる。そうすることで、地域住民の方が川に関心があると河川改修を進めていく上で合意形成がしやすくなる。本研究では、都市河川で行われている地域活動で得たアンケート結果をもとに、川を活かしたまちづくり事業をより魅力的にし、また継続して行くためには何が必要であるかを考えることにした。

2. 対象河川イベントの概要

1）ふれあい室見川（写真 1）

早良区で行われているプロジェクト Muromi の一環で、市民と行政の協働による企画である。今年で 6 年目を迎え、直接川にふれあうイベントや市民手づくりの 19 個のイベントを開催した。この事業は 2007 年度をもって終了した。

2）那珂川フェスタ（写真 2）

博多区美野島南公園沿いの那珂川で行われた市民と行政の協働によるイベントである。今年で 3 年目を迎え、新たに投網体験を取り入れた。昨年も人気があったミニ水族館をはじめ、“自然”にふれあえるイベントを 9 個開催した。この事業は 2007 年度をもって終了した。

3）樋井川一斉環境調査（写真 3）

地域住民「樋井川を楽しむ会」が主体となって行っているイベントで、今年で 2 年目を迎えるイベントとなった。樋井川の上流から下流までを調査地点とし、水質・生きもの（植物）・ごみの組成調査を同日同時刻に行った。地域住民、NPO、企業、高校生、小学生などの参加者が 150 人程度集まり、交流を深めた。

写真 1　ふれあい室見川

写真 2　那珂川フェスタ

写真 3　樋井川一斉環境調査

3. 研究手法

アンケート調査は、すべて対面による聞き取り方式でイベントに参加された来場者の方に行った。アンケート内容は来場者の属性やまちづくりイベントに対する意識調査である。また、対象とする河川の地域活動に積極的に参加し、地域住民の方から意見を抽出した。

4. 結果及び考察

今年度も昨年度とほぼ同じ部数のアンケートを回収した。回収部数はふれあい室見川では 116 部、那珂川フェスタでは 43 部であった。これらのアンケート結果から、概ねの方がイベント活動自体は楽しんでいただいていることがわかった。しかし、川を活かしたイベントをただ楽しんでもらうためだけでは、川に関して理解を深めてもらったことにはならない。住民の方々に川の魅力を伝え、興味を持たせることで、再び川に関心を持っていただくきっかけをつくることが必要であると考えられる。

4.1 川に関心が持てるイベント

図１に示す結果より、川に関心が持てるイベントとして、ミニ水族館が最も効果的であると考えられる。それは、今まで「ふれあい室見川」、「那珂川フェスタ」において２年連続ミニ水族館を実施したところ、イベント全体で一番人気があった催し物というのが一つ目の理由である。２つ目は昨年「那珂川フェスタ」で初めてカヌー体験を実施し、人気があったが、今年は人気がなかったからである。その結果から、毎年のようにミニ水族館は人気があり、川に関心が持てるイベントであることには間違いないといえる。また、ミニ水族館と同時にさわるふれる体験コーナーを設けてザリガニ釣りを実施したところ、参加者の多くが楽しんで、川に関心を持ってくれるきっかけとなったと考えられる。

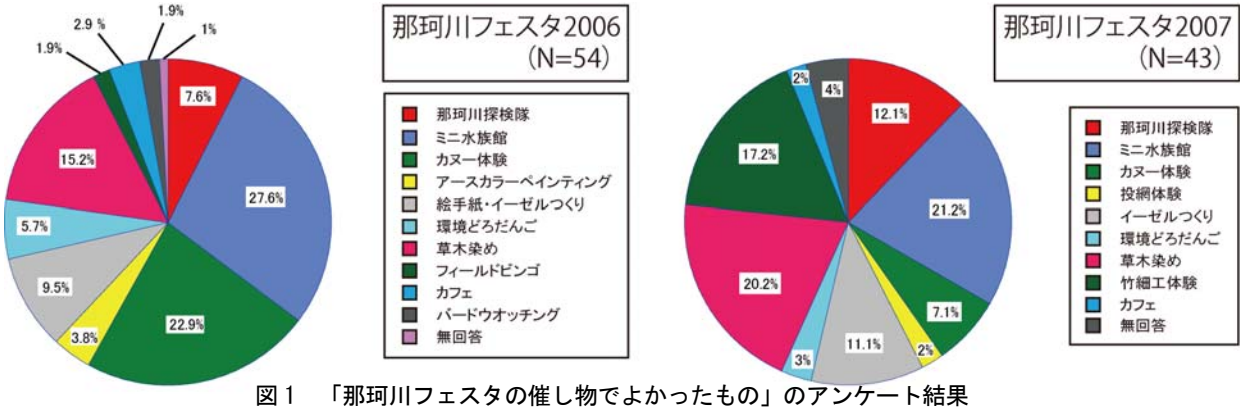

図１　「那珂川フェスタの催し物でよかったもの」のアンケート結果

4.2 イベントの継続

那珂川フェスタ 2006、2007 も「去年も那珂川フェスタに参加したか」と尋ねたところ、約 2 割の方が去年も参加されたことがわかった（図 2）。そして、那珂川フェスタ 2005～2007 で「来年も博多区でイベントをするとしたら来たいか」と尋ねたところ、どの年も 70～90％の方が参加したいという結果から、イベントの継続が求められる。

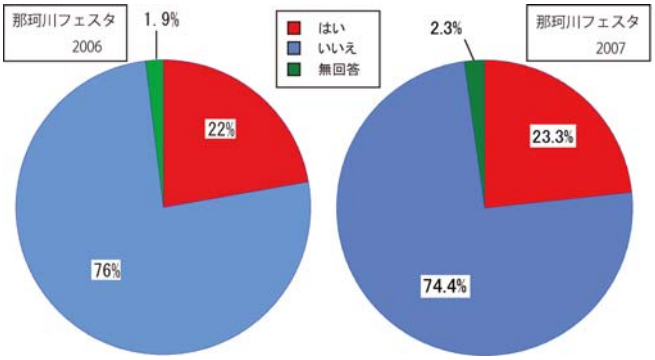

図２　「那珂川フェスタに去年参加したか」のアンケート結果

4.3 今後の川を活かしたまちづくりのあり方

今年度で市民と行政が協働で企画実施した「ふれあい室見川」、「那珂川フェスタ」は終了するので、今後も継続的に地域住民の方が川に関心が持てるようなイベントを実施する必要がある。そこで、樋井川の事例を見てみる。我々と「樋井川を楽しむ会」は 4 年前から継続して毎月一回の定期清掃を行ってきた。しかし、ごみの量が全く減らないことから、昨年樋井川一斉環境調査を行った。そして、上流から下流までの地域住民の方をつなげることで、川に関心が持てるのではないかと考えた。そうすることで、今年に入り樋井川楽しむ会の方から樋井川ごみ 0 プロジェクトと称してごみ組成調査、樋井川あおぞら美術展（写真 4）をやりたいという提案があった。今後の川を活かしたまちづくりのあり方は川を通してネットワークを構築し、情報の共有化をはかって行ければ行政主体ではなく、市民主体の川を活かしたまちづくり事業が展開されるのではないかと考えることができる。

写真 4　樋井川あおぞら美術展

5. 結論

今年度で川を活かしたまちづくりは終了した、しかしながらアンケートの中での意見で『今後もこのようなイベントを続けて欲しい』という意見が多かったことから、何らかの川を活かしたイベントを継続して行っていく必要があると考えられる。地域住民の方が川のイベントを継続しやすいように行政または学生である我々がサポートして行けば、イベントが継続していくことが可能であると考えられる。

参考文献

1）高辻伸彰：川を活かしたまちづくり事業の比較分析に関する研究，福岡大学工学部卒業論文，2005．2）さわら魅力づくり推進委員会：ふれあい室見川来場者アンケート結果，2007．3）博多区役所総務部企画課：那珂川フェスタ来場者アンケート結果，2007．